

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

炎を知らない子供達

先日、高校の家庭科の先生達への講演を行った折に、今は炎を知らない子供がいると聞いた。たばこ文化がなくなり、マッチを常備している家庭が減り、さらにコンロがIHになったお宅では、子供が炎を見る機会がないというのだ。

蚊取り線香も火をつけるのではなくコンセントに差すタイプに変わり、お誕生日会でケーキをろうそくを立てるくらいでは、炎は上方も熱いということすら知る機会はないのだろう。

「サバイバル」という言葉に憧れるはするもの、子どもその言葉からは遠いところまで日頃の暮らしが営まれている。

今年は何人の戸建の別荘と、リゾートマンションの両方に招かれ、大変ありがたい休日を過ごすことができた。それも同じ月での訪問であったため、両方の暮らし方をリサーチさせて頂けた。どちらも緑を楽しむ過ごし方だが、その違いは大きかった。

戸建は外のお手製のデッキで鳥の声を聞きながら、パンとコーヒীর朝食を楽しみ緑の木々に浸る。かた

や五階のリゾートマンションでは、大開口サッシから見えている絶景の山々に、胸いっぱい解放感を満喫し、稜線を眺め楽しむ。

どちらも大変な贅沢なのだが、あえてそれぞれをマインスマンで見てみると、地面に近い土の香りがする戸建では、花に誘われたアブが匂いを嗅ぎつけ飛んできた。同行した都会育ちの虫嫌いは、跳ねるように飛んで家の中に逃げ込んでいた。男のくせに情けないと思っていたのだが、私に向かってくるさすがにそうは言っていられなかった。

そして五階のマンションでは蚊はいないのだが、気が付いてみると虫の声も聞こえない。秋の夜長の虫の音がしないのもどんなものだろうとも思ってしまう。

自然との関わりが希薄になった昨今では、あえて関わりつとしない自然を楽しむのは難しく、難しいだけではなく快適と感じられるかどうかとも問われてくる。

どちらも貴重な経験をしたいと思いつけていると、ふっとキャンプに行っていた頃を思い出した。テントを張り終わらないつちにポツ

ポツと雨が降り始め、やっと食事を済ませたテントの中では、ひたすら明日の天気を祈りながら眠るほかなかった。

だが夜が更け切った頃に雨はやみ、それぞれのテントから二人一人と抜け出し、湿った中で火を起こしてコーヒーを飲んだ時の美味しかったこと。キャンプ場では火起こし上手がスターになれる。その頃一緒に行っていた子供達は大人になり、みんなバーベキュー大好き人間となって、人を呼んで庭で肉や魚を焼いているまっぴいる。

キッチンのリフォーム時に、「コンロはIHがいいですか？ ガスにしますか？」と単純に質問することが多いが、「家の中で唯一火を付けることができるものがいますか？」と聞いているのだということになる。ちなみに戸建の別荘もリゾートマンションもどちらもIHコンロになっていた。燃えないということが優先されていることだろう。

リゾートという自然の中で、炎がない暮らしになっていることが、何だか意外でもあった。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会会員。